分科会Ｆ［自由］　社会・経済

報告１　煤田徳東（桃山学院大学ゲスト講師）

テーマ「中国における新型コロナ肺炎の初動期対応について」

新規感染症の防御対策と初動の重要性はすでに広く認識されている。初動は被害範囲拡大防止に極めて重要であり、逆の場合甚大な被害をもたらしかねず、将来の新規感染症に備えるための重要な研究課題の一つである。２０２０年６月現時点でコロナウィルス新型肺炎症の人口１０万人感染者数は、米国では６４６人で世界最多、続いてスペイン５２２人とブラジル４３４人に対し、中国は 6 人となっている。中国は政府が強いリーダーシップをとり、武漢閉鎖から挙国対応で第一波感染拡大期防疫に成果を収めたという。しかし、初動期に中国政府の発表とは異なる事実も確認することができ、疑問が残る。

本文は、「初めての感染者」、「ヒトからヒトへの感染」、「無症状患者扱い」をキーワードとした場合のいくつかの事実発見を述べ、中国の初動期対応の経緯を振り返り、政府発表と国内外論文発表などとの矛盾点を指摘する。

問題を解明するために、中国で構築されてきた既存の感染症防疫体制、即ち感染症観測システム、感染予防組織と人員体制、公共衛生体制と行政組織及び関連法案の形成と歴史を踏まえ、今回のコロナウィルス発生時にどの程度機能し得たかを検証する。

問題点としては、SARS 以降に残された緊急時の対応問題が再現し、構築されてきた防御システムの機能不全、すなわち「観測システムの有効性の欠如」、「感染予防組織と人員体制の不足」、「専門家組織と行政組織間の連携不足」が確認できる。それらの問題点の誘因となっている「経済発展優先主義」、「感染症に対する法的整備の事後性」を改めて指摘した上で、改善課題を提案する。

報告２　張哲（同志社大学大学院博士後期課程）

テーマ「日本の対中農産物輸入の規模拡大と構造変化――財務省「貿易統計」に基づいて」

中国は 2001 年の WTO 加盟を契機に急速な経済と共に経済のグローバル化を遂げている。国際貿易全般だけでなく、農産物貿易も比較優位論に立脚する形で量的拡大と質的変化が見られる。ここ 20 年間、中国の農産物輸出額の地域別構成は、アジア、ヨーロッパ、北米、アフリカ、南米、大洋州の順で安定的に推移しているが、最大の輸出相手地域であるアジアのうち、日本のシェアが最も高い。実際、日本はこの間中国にとって農産物の最大輸出先国なのである。

日本側からみれば、2000 年代に入ってから、中国はアメリカに次ぐ 2 番目の農産物輸入相手国である。8,237 億円、6,331 億円だった 2000 年の対中農林水産物、食料品の輸入額は 2019 年にそれぞれ 1.45 倍、1.42 倍に増大し 11,910 億円、8,995 億円となった。全体としては増加の傾向にあるが、それぞれの年平均伸び率は 1.94%、1.87%しかなく、停滞もしくは後退の時期もあった。背景に冷凍ホウレンソウの残留農薬問題(2002 年)や毒餃子事件(2008 年)、両国関係の悪化がある。近年、日本では中国産農産物をめぐるネガティブな報

道が少ない。それは、安全・安心を基本とする輸入農産物の品質管理が双方で行われていることを表すと同時に、外食産業を中心に中国産農産物なくして経営が難しいということの反映でもあろう。

このような日本の対中農産物貿易の拡大要因に関し、田（2007）は日中貿易における比較的強い補完関係が存在することを挙げた。厳（2007）は対中輸入農産物の増大が中国の人件費および資材費の安さによると指摘し、両国間の農産物貿易を影響する要素として、為替レートの変化や日中関係も重要だと論じる。ところが、2010 年前後の両国間関係が悪化し、安倍政権 2 期目に入ってからの長い間に両国内の社会経済情勢も大きく変化している。両国間の関係は紆余曲折を経ながら、近年顕著な改善を見せている。それを受け、両国間における農産物貿易の規模拡大と構造変化も現れている。

上述の時代背景を基に、本研究では財務省貿易統計のデータベースを用い、主として 2000 年代後半以降の対中農産物輸入に焦点を絞り、その量的拡大と構造変化を定量的に明らかにし、それらを規定する要因について両国内および両国間から多面的に分析する。具体的には、第 1 に、対中輸入に占める農産物輸入割合、農産物輸入額、主要農産物の輸入量(金額・数量ベース)ならびに価格をデータ分析で描き出す。第 2 に、対中農産物輸入の変化がもたらされた要因について両国における農業経営の基礎的条件(日本の後継者不足、中国の人件費高等など)の変化や両国間の外交関係から分析する。第 3 に、野菜や水産物といった主要輸入食料品の動向およびその背景的要因を明らかにする。最後に、データ分析などの結果を踏まえ、日本の対中農産物輸入の必要性と可能性を考える。